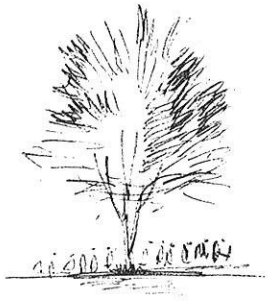
ひかりのこ

光の子



No.61　1995. 9. 1.

● この一事に努める

海のおと

え・中島英子

みにくいものは
てぢかにみえる
うつくしいものは
はるかにみえる

☆　☆　☆

うつくしいものはかすかだ
うつくしい野のすえも
うつくしいかんがえのすえも
すべてはふっときえてゆく

☆　☆　☆

いつになったら　すこしも人をにく
めなくなるかしら
わたしと　人びととのあいだが
うつくしくなりきるかしら

八木　重吉

発行／社会福祉法人 光の子どもの家　ＴＥＬ／0480－72－3883　振替／00130－１－128022
編集／光の子 編集委員会　〒349－11 北埼玉郡大利根町砂原277　印刷／社会福祉法人 共愛会

あらずもがな

マタイによる福音書第９章12節

イエスはこれを聞いて言われた。「医者を必要とするのは、
丈夫な人ではなく病人である。」

理事長　福島　勲

ゲーテ作、ファウストの最初のところに「あらずもがなの神学をも学んだ」という台詞がある。

神学生時代にこれを読んでいやに気になった。

あれは鴎外の訳だったと思うが、「あらずもがな」とは、あってもなくてもよい、という意味かと思っていたが、広辞苑ではずばり「なくてよい」とある。

このところ原文ではｌｅｉｄｅｒａｕｃｈとあるが、相良守峯の辞書には、直接このような訳はない。しかし相良訳のファウストでは「いらんことに神学までも研究してみた」となっている。

鴎外では神学そのものが不要のものと解されるし、相良訳では神学そのものはさておき、これを学んだことがいらんことだと読みとれる。

しかし、ゲーテは他のところで悪魔の口をかりて「神学ははなはだ厄介な学問で、この道に入ったら迷路にまぎれこむのは避けがたい。

おまけにこれには毒がたっぷり混じっていて、そいつが薬と見分けがつかないので、はなはだ困る」と言っている。（小栗浩・人間ゲーテ）

三浦朱門がその著「老いれば自由に死ねばよい」のなかで、教会は信仰の邪魔になる、と書いている。

聞き捨てならない言葉だが、おそらく人生経験豊かで学識に富んだ人たちにとって、消化不良の神学めいた説教を長々と聞かされては、教会に行くのが嫌になり、教会は信仰の邪魔になるとでも言うのであろう。

だからといって神学は不要だというのは、いささか短絡すぎよう。

正統的な神学のないところでは、その説教は個人の意見や感想になり社会問題や政治への関心から、道徳倫理や人情論に終わってしまう恐れがある。

キリスト教の教義は独断に陥らないよう警戒して、教会会議で討議研究して練り上げ、これに基づく協議を踏んできた。

オカルト的宗教の危険は、彼らに神学の研鑽と積み重ねのないことである。

思うて学ばざれば殆（あや）うしと孔子も言っている。

我々が唖然とし、義憤を感ぜさせられたオウム真理教の非人道的事件に対し、知識人らがいろいろと解説し意見を述べている。

その中の一つに、日本の教育は宗教や哲学を教えない。また道徳倫理観の欠如が人間を知的野獣にしている、というのがあった。

すでに十六世紀のフランスでも、物知りをつくる目的だけで、徳や知恵の追求をすることを教えないと、教育を批判している（モンテーニュ）

聖書から盗用したハルマゲドン（ヨハネ黙示録十六・十六）のように他宗教からの用語を借りてくるが、実質、彼らの思いつきの内容であり行動である。

最高の教育を受けたものでも学んで思わない暗さがある。

倫理性を失った科学もまた、「あらずもがな」のものである。

この世は病んでいる。魂の医者を必要としている。もし人類がエデンの園の延長であったなら、人類の医者イエスも「あらずもがな」だっただろう。

だが、イエスはこの世が医者を必要としない健康者とは言っていない。義人あるなし、一人だになしとパウロが代弁している

我々の施設も「あらずもがな」であってほしい。

というと関係当事者は、気色ばむであろうが、収容されなければならない不幸な子どもがなくなることを願っての言葉である。

病めるこの世の現実と願望とのギャップは、容易に取り除けそうにはないことだが。

エッセイ

山口　瞳さん

山口瞳さんが亡くなった。慣れ慣れしい様だが作家の山口瞳さんの事である。私の家の中では「ひとみさん」または「やまぐちひとみさん」で通用する事になっている。つまり、瞳さんのファンなのである。

ひとみさんは、「江分利満氏の優雅な生活」で直木賞をとった。通常のひとみさんファンなら、これぐらいは最低読んでいなくてはならないのだろうが、私は読んでいない。あの頃はファンでも何でもなかったからだ。

二十年以上も前に、「酒飲みの自己弁護」という本が出た。これがおもしろかった。実におもしろかった。これを読んだのがきっかけになって、ひとみさんの本を少し読む様になった「酒飲みの・・」は、短いエッセイで、山藤章二さんのさし絵が、その全ての話についている。山藤さんの絵が、抜群にうまく、そしておもしろいのである。私は文章を読んで楽しみ、絵を見て楽しんだ。だから、自分一人で読んでいるのがもったいなくて、人に勧めて読んでもらったりした。そのうちに、あの大事な本が見つからなくなってしまった。私は残念でならなかった。そして、その残念さは、今も続いている。

出版社のＫさんと夕食をとっているとき、私はそのことを話してみた。彼は「文庫本で出ていますよ」と言った。私は本当の読書家じゃあないから、文庫本ではだめなのである。あの厚さで、あの大きさで、あの重たさであって、あの絵がついていなければならないのである。だから、文庫本で読み返してみても、決して満たされるものではない。Ｋさんは「どこかで探してあげますよ」と言った。そして何日かして送られてきたのは「酔いどれ紀行」であった。「酒飲みの・・」ではなかったのである。体裁はたしかに似ている。しかし違う本であった。私は中身に目を通す気にもなれなかった。ただ、表紙にひとみさんの絵がついていて、それがきれいだったから、表紙の絵だけは楽しめた。タヒチ島の近くのボラボラ島の海の絵であった。ボラボラ島は、二十何年か前に私も行った所だ。そんな意味で興味があった。ひとみさんの絵はきれいである。私が描いたボラボラ島の海は、こんなにきれいには描けなかった。南太平洋の海はきれいだと聞いてはいたが、まさかあんなに美しいものとは想像もしていなかったから、エメラルドグリーンの絵の具を、一本も持って行かなかったのである。だから、やっぱり普通の海の色になってしまい、珊瑚礁に囲まれた信じられないような美しい海の色とは、ほど遠い絵になってしまった記憶がある。

山口瞳さんは、週間新潮に男性自身という二ページの文章を、一六一四回連載した。壽屋、サントリー時代の仲間、柳原良平の絵も一緒である。

ひとみさんは、何年前からか、信濃町の慶応病院に通っていた。男性自身の文章の中にその事がよく出てきていた。私も、ある時期慶応病院に通い続けていたから、ひょっとしたら、私の大好きなひとみさんに出会うかもしれないと、密かな期待を、いつも持っていた。けれども、写真で見るハゲ頭の、ズングリしたあの老人には一度も出会う事がなかった。

八月三十一日号の週間新潮が、恐らくひとみさんの最後の文だろうと思う。そこでは、たぶん、武蔵小金井の病院に入院していて書かれたものだろうが、何か、ご自分のすぐそばにある未来を予見するような文章を載せている。

「どうやって死んでいったらいいのだろうか。そればかり考えている。唸って唸って（あれを断末魔というのだろうか）カクンと別の世界に入ってゆくのだろうか。」

私は、私の庭に咲いていたハイビスカスの花を取って来た。南太平洋のボラボラ島に咲いていたのと同じ種類の花である。澄み切った青い空とエメラルドグリーンに輝く明るい海の記憶が甦ってくる。私はこの花を、小さなコップに活けて、ひとみさんを思った。

私のそんなセレモニーを、もち論誰も知る筈はない。

県立高校美術教諭　中島　睦雄

学者もどきのつぶやき ⑯

病室の窓から

山形大学医学部教授
仙道　富士郎

まさしく鬼のかくらんというのだろう。胃潰瘍からの出血で二週間入院してしまった。

何かと忙しくしていて耳鳴りが生じた。一歳半の時に右の中耳炎をわずらい、当時のこととて抗生物質もなく、治りきらずに鼓膜に穴があいたままでほとんど聞こえない。左の耳鳴りが加わり、自分の声が全体にひびいて、何ともわずらわしい。数日後に富山での講演を頼まれていることもあり、耳鼻科にいる教え子に治療を依頼した。いろいろ検査した後に彼は念のためにとステロイドという、その機序は不明なのだが、いろいろな病気の急場をしのげる薬を調合してくれた。おかげで耳鳴りはだんだんによくなり、無事講演も済ませることが出来た。

大学に帰って例のごとく物書きをしていると、何となく根気が続かない。なまけ病が始まったのかなと思った。

と、びろうな話で失礼だが、ここ二、三日、便が黒いことを思い出した。いつも大酒を飲むとそんな風になるのだが、少し色が黒すぎるような気がする。

小生は医師免許証を持ったにせ医者なのだが、タール便という言葉が頭に浮かんだ。上部消化管の出血の際に便がコールタールのように黒くなることを言う。「ステロイドでタール便になることある?」内科から来ている大学院生に聞いたところ、彼女はご注進とばかりのその内科の助教授に連絡し、受けた方はご存じかと思うが、およそ非人道的な胃カメラの検査になってしまった。

しかし、本当に幸いなことに、その検査で、胃潰瘍からの出血が見つかり、即刻の入院となってしまった。当初、事を大げさにしてくれたと当惑したが、助教授に注進してくれた大学院生の彼女に感謝しなければならないとまず思った。

その次に、耳鼻科の教え子に知られることを恐れた。内密にしてくれるように頼んだ。しかし、大学という所は、情報が伝わるのが異様に早いところで、たちまち彼にも知れてしまい、山田一郎の仮名で入院していた小生の所に見舞いに来た。

しきりに詫びる彼に薬のせいではないと思うと抗弁した。いや本当に少なくとも原因の大部分は私の多忙に起因するストレスに由来すると今でも考えている。

何回か地獄の胃カメラを受けていると、だんだんに慣れてくるのだがそんなときに、主治医が「他の所に、も潰瘍の痕があり、今回のものも再発でしょうね」と言ったときは、ほっとした。しかし、私は耳鼻科の彼にまだそのことを言う暇もない。困った教師である。

それにしても、病院がこんなに暗い雰囲気の場所であるとは入院してみて初めてわかった。

病室はすべて禁煙になっており、エレベーターの踊り場で患者が喫煙しているのだが、その中に点滴の管をぶら下げながら、土色の顔色をして、本当に懸命とも言える形相でたばこを吸っている五十歳ぐらいの男をよく見かけた。病が不治であることを確実に知っていることを告げるその暗い顔を見たとき、どうやって医師や看護婦は、その場限りではない真の人間関係をかれと結ぶことが出来るのだろうかと考えた。少なくとも私には不可能である。

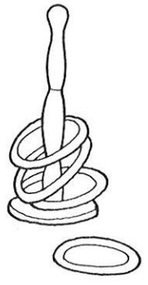
そして、柔道部の学生の卒業追い出しコンパで「君にとって患者は十人でも、患者にとって医師は一人でありすべてなのだ」と強調して来たことを少しく悔いた。

全精神をこめて、各々の患者に対応していたら、その医師が病気になってしまうのではないか。患者になってはじめて医という行為の大変さし少しく気づいたなど、いかに基礎医学の教師とはいえ、医師を育てていかなければならない者の一人として、自戒の念しきりではある。

ここ二、三回「光の子」の原稿はいつも東京からの帰りの電車の中で、書いている。今日はアメリカからの帰りの電車の中である。

前の席で、幼児がしきりに母親にジュースをねだっている。愚妻は五人の子どもを抱えてどう対応していたのだろうか。あるいは子どもたちが、そうした行為の無駄なことを知らされて黙っていたのだろうか・・・などと、止めどもなく想いがめぐる。

電車は米沢をすぎた頃だろうか。



トムソーヤたちの朝 ⑥

日本キリスト教団東大宮教会
永　野　三　郎

澄みきった夜空に皓々とさえわたる月を見上げ、草むらから「リーン、リーン」と響く虫の音に耳を傾ける頃となった。

あの暑かった夏は確実に過ぎ去り、次の季節がやってきている。

夏をこえた子どもたちは、背丈がぐんと伸び、日焼けし一段とたくましくなった気がする。

毎週会っていながら、夏休みをはさんだこの時期は、学校から離れ、普段と違った生活を送ったからであろう、雰囲気や顔つきが違っている。それぞれの夏を楽しみ、自分のものとした自信に溢れているのだ。

それにくらべ、あの夏をやっと耐え忍んだ・・という私などと、発散するエネルギーが全然違う。

こうした子どもたちと接していると『子どもから与えられるもののなんと多いことだろう』と、今更ながら驚かされる。

教会学校の夏の大きな行事はやはり夏期学校だ。今年は七月三〇日から八月一日まで群馬の赤城クリスチャン荘で行われた。

幼児から中学生まで自然の中で一緒に生活し、聖書のみ言葉を詩編十九を手がかりに、『大発見・・神さまの宝さがし!!』の主題のもとに展開し学んだ。

自然の中で耳を澄まし、普段目や心を閉ざしてしまい見えないでいるものを、しっかり見てもらいたい。いろいろな思いにとらわれてしまって鈍くなっているこの心を、神さまにひたすら向けて過ごしたい。詩人の八木重吉が、

この聖書のことばを
うちがわからみいりたいものだ
ひとつひとつのことばを
わたしのからだの手や足や
鼻や耳やそして眼のように感じたいものだ
ことばのうちがわからはいりこみたい

とうたったが、まさに、こうありたい、こんな想いをもって過ごしたいと願っていった。

静かな澄みきった覚満渕のほとりで、地蔵岳の頂上は付近の岩礫地に根を張り、厳しい環境にも負けずひっそりと咲いている数々の花々。星の研究をしていられる荒井先生のお話を伺いながら、「あっ、あれが琴座のベガだ。白鳥座のアルタイルだ。天の川も見える」と子どもたちは歓声を上げた。まさに、

天は神の栄光を物語り
大空はみ手の業を示す（詩編十九）

私たちのどんな説明よりも、子どもたちは自分の魂の奥深くにそうした感動を取り込み、秘やかに蓄えてくれているだろうと思う。

反省会では、今後の課題として、いくつもの大切なことが私たちに示された。それを謙虚に受けとめ来年度に生かしていかなくてはならないが、私たちの思いをはるかに超え養って下さる力により頼んでしまう、小さな私である。

この夏、また忘れられないことにN君のことがある。

家庭的に恵まれず、心の居場所を求めて家出を繰り返していたN君に微笑が戻ってきた。

この夏は、一冊の本をきっかけに、一緒にご飯を食べ、おしゃべりをしたり、プールやボートで遊んだり、図書館や映画館へと心を通わせる機会を何度か持つことが出来た。

ある日、「明日は利根川に行こう」と言われ、「えっ?この暑い中を?」と私は少々戸惑った。「木も何もない利根川の堤防では、永野さん干物になっちゃうよ」と菅原先生には、またカッカッと笑われた。

でも、やはり彼の意思を尊重して出かけた。ギラギラと太陽が照りつける真夏日だった。彼の指示通り車を進め、利根川に近づいた。

「そこを曲がって・・」私たちの車は、こじんまりしたお寺の前に止まった。

「おかあさんのお墓があるんだ。」

「そうか、そうだったのか・・」

私の心に熱いものがこみ上げてきた。それから二人は、お墓をきれいにし、お花を手向け、祈った。

「お母様、大切な息子さんをお預かりしました。心に喜びをもって生きることが出来るようお手伝いさせて下さい。神さま、どうぞ知恵と勇気と愛を授けて下さい・・。」と。

まだまだほんの歩み始めたばかりの彼に主が伴って下さり、常に愛されている安心感を持てるようにと切に願っている。

この夏も沢山の感動を与えられ、収穫の秋に歩みを進めている。

プ・リ・ズ・ム

光の中で

佐藤家

だれでも、キリストにあるならば、その人は新しく造られたものである。古いものは過ぎ去った。見よ、すべてが新しくなったのである。（コリント第二書五：十七）

亜季羅と寝る前に聖書を読むようになってから一年半になる。

「だれにでも、消し去ってしまいたい過去がある。長く生きていればいるほど罪を積み重ねる。それは自分自身であるいは、人から受ける場合もある。亜季羅は罪の数では俺の半分以下もないが、心の傷は数倍も辛い思いをしてきた。しかし、イエス様はそんな君を新しく作り替えて下さる。自分の嫌なところ、罪責感から解放され、希望がもてるんだ。」その話の間、何度も彼はうなずいた。

数日前に彼の誕生会を行った。

私は彼に、正直であれ、まじめであれ、何事も勇気をもて突き進めとお祝いの言葉を贈った。この言葉を贈った背景には、彼は、私の財布からお金を抜き取っていった。はじめは、知らないと言っていたが、すぐ表情にでて発覚する。しかし、なかなか謝れず私も感情的になっていて何発も彼の頬を張り飛ばす。貝のように身を硬くして丸くなった彼。何度も何度も「ごめんなさい、ごめんなさい」と繰り返す。「俺のせいで、お前にバカなことさせたな。ごめんなさい」と彼の肩をだく。「穴水さんは悪くないんだ。俺が悪いんだ」と崩れ落ちるように私の胸の中で泣きじゃくる。「お前は、いい子だよ。お前は正しい子だよ」私は、彼を抱きしめた。

君は誰よりも清いよ。勇気をもてきみなら必ずできる。穴水　祐介

子どもたちの季節

仙道家

『『遭っちゃった！』と言ってね、まるで五月とメイちゃんがトトロに遭った時にお父さんに抱きついてきたように、詩美が抱きついてきましたよ。」

と、池田保母より。

トトロに出てくる五月とメイのようにかわいらしく仲の良い渥美姉妹。

その詩美が『遭っちゃった！』のは、夢を運んでくれた『トトロ』ではなく、現実でしかない『変質者』であった。

「なにやってんのよ！」

脅えている友人の手を引いて逃げてきたと詩美。

「貴樹の真似したんだよ。」

詩美はニコッと笑った。

クリスマスと同じくらい待ち遠しい誕生会。その誕生会に担任の先生をご招待することになった。

先生に来てもらうには嬉しい年齢も過ぎた将司。ご招待するように言ってから二カ月、誕生した日からすでに一カ月が過ぎてやっと重たい口を開いた。

「やだなぁ・・恥ずかしいよぉ」

ニコニコして見せたり、暗い表情だったり・・。

当日は心ここにあらず。

そんな状態を吹き飛ばすようにまわりは盛り上がり、将司の顔から笑みがこぼれ始めた。先生と菅原先生はお酒を酌み交わし、それを気にしながらも将司は友人と話しに花を咲かせていた。

「これだけは他の誰にも負けないと言うものを一つ見つけて下さい。」

中学に入ってから、得意だった分野の成績に伸びがない将司への先生のお祝いの言葉。そして、将司が恐縮してしまうほどたくさんの図書券をいただいた。

「これで漫画本は買わないよね。」

「当たり前じゃん。どうしよう。」

将司の顔は真剣そのもの。先生を、頭を下げて見送った。将司の誠実さ、可能性を信じていきたい。

原田家日記

下山　英哉

氷のとける音でゆっくり目の前が明るくなった頃、こんなことを思った。

もし、人間が、生まれながらにして大人であって社会を営むような世界であるならば、もしくは子どもの過程なしに成人部分だけで始まるものなら、私がこよなく愛するフランス映画は胡蝶の夢になっていたのだろうか。

私は、今夏より新たにやってきた洋の姿に、人にとって子どもである時間が不可欠でありいかに大事なものであるかを強く感じた。

それは、半年の間この家で暮らした感想でもある。

彼の一つ、ひとつの動きの中に普段どうしても見逃しがちな日常が眼に飛び込んでくる。なんら個別性を感じさせない〝喰う、寝る、遊ぶ〟といった行いに成長への糧を導き出している。

人にとって喰うは生きるの根本、食物を食うことから認知、判断を学ぶもので最終的には自立へと連なっていく。

つまり、ものが何であるか、どんな性質を持つのかを知り、応変してゆくのである。

時の流れを体で感じとることを身につけることが寝ると言うこと、また、遊びが伝えるものは、情緒であり関係であり、器量である。

心を揺さぶるものに美しさと感動を受け、不快にさせるものに醜さと疑問を抱く。それがなぜなのか行動により解決しようとする。

容易にとけない理にいらだち、悩み続ける。

私はその子どもの部分が人類に文化を作り出す原動力となったのではないかと思う。

洋にとっての子どもの部分が成人に達したとき、どういった方向への原動力となるのだろうか。興味がある。自分の関わりのどの部分で役に立つのだろうか。

氷がとけたとしても濃さが変わらないように、これからも関わってゆきたい。

河のほとりで

旗井の家

春休み半ば卓は大きなトラブルを引き起こした。

こんなことではもうここで一緒に暮らすことは出来ない、今後の身の振り方を考えるように・・と厳しい話が菅原先生からあった。

ここを出れば恐らく高校進学はない。そんな思いを私も卓自身も持ち、とにかくどんなことをしてでも許してもらわなくては・・、そう考えた。

菅原先生が本気で子どもを追い出そうとしているわけはない・・そう思いながらも、これまでとは違う厳しい対応に危機感を持たずにはいられなかった。

卓の十四年間の人生のうちの十年を超える期間を、親に代わって関わってきた私の責任は大きく、卓が出ていくことになれば担当者一人が涼しい顔をしてここに居続けることは出来ないことを伝え卓とともに謝罪し、許しを乞い続けた。

家のみんなも泣いて許してくれるように頼み願って、ようやくのことで、条件付きながらも、もう一度が許された。

この危機を機に卓は努力して変わり続けた。

めっぽうな短気が些細なことにも腹を立て、ものにあたる、人に突っかかる卓だったが、それも時間とともに表現されることが少なくなっていった。

来年高校を受験することに心を向けなおし、とにかくがんばって勉強に打ち込んだ。「勉強しなさい。」という必要など全くなくなった。

九月に陸上大会があるため、部活動にも毎日参加していたが、疲れたからと勉強を休むこともなかった。部活動と受験勉強を見事なほどに両立させていた。

そして、新学期早々に行われた実力テストにそのがんばりの成果が表れた。全ての強化の点数が前回の実力テストより上がっていたのである。

高跳びのバーの高さを一ｃｍでも高くクリアーするために毎日地道な練習を行ってきたように、点数を一点でも多くとるために毎日コツコツと勉強をしてきた卓の努力が報われたのである。

トラブルは起こさない方がいい。しかし、起こしてしまったら、それをマイナスのままで終わらせるのではなく、それをバネにしてそれまで以上に大きく成長することが出来る・・ということを卓は私に具体的に示してくれた。

卓とともにもうひとがんばりしよう！、と思う。　倉沢　智子

現場から

のびやかに ふくよかに Ⅲ

笹山 恵理

つくつく法師が夏の名残をうたうこの頃です。

皆様いかがお過ごしでしょうか。

今回は森山辰二（五才六カ月）、洋（二才四カ月）の兄弟と、桐島美季（二才八カ月）と担当の私とのある夜の風景をご紹介いたします。

小さな布団が三枚並んだ四畳半。お風呂をあがったホカホカの身体の三人が三様に遊んでいる八時半。

辰二は幼稚園から借りてきた『ぐりとぐらのかいすいよく』を広げている。「ぐ・・り・・と・・ぐ・・ら・・の・・」一生懸命文字を追っている。意味は分かっているのかな？。私はこのまま辰くんが眠ってくれたら楽だという邪心を隠せず、本読み役を横取りする。横取り行為にほのかな抵抗を見せながらも話を聞き始めた辰くんに邪心は大きくなる。

「三人でごろんして読もうか？」。二歳の二人は本読みには全くのってこない。洋はタオルケットをマントにして「見て、見て！」と大騒ぎ。みーちゃんは手にもったマジックを布団の上で使おうとしている。げっ！。「みーちゃん、お布団の上ではやめようね。明日いっぱいお絵かきしようね。」第一次反抗期まっただ中のみーちゃんのご機嫌を損ねないよう言葉を選び声をかけると、辰二君「早く続き読んで！どうしてやめるの！」「わかった、すぐ読むよ」ぐずり始めると手に負えない辰ちゃんを何とか交わし、みーちゃんからマジックを取り上げ、本読みを始める。けれども眠る気配のない辰二君。そこで私は、歌攻撃を開始する。昨日おとといと好評だった〝アイスクリームの歌〟を歌うとみーちゃんが一緒に歌い出す。これでいい雰囲気になるかなという期待をよそに、「その歌やめて、辰くんがガンダムZ歌うから！」あーはいはいと、辰くんの歌に聞き入っていると、マントでご機嫌だったはずの洋がみーちゃんを蹴っ飛ばし、みーちゃんが泣き出した。みーちゃんを抱えて私は洋を叱る。「こんな悪い足は洋の足じゃない！。洋じゃない子はお部屋にはいないはずだよ！。」洋が布団につっぷして泣き出す。泣いた子は泣いたままにしておき、私の体にくっついて離れないみーちゃんを膝に乗せ〝ドロップの歌〟を歌い始めると泣いた洋もにっこり。小さな二人の喧嘩を見ていた五歳でお兄ちゃんの辰くんは「ぼくが真ん中に寝て、みーちゃんを守るよ」とりりしい発言。「さすが辰くんだなあ。ほんとうに辰くんのおかげで恵理さんはどれだけ助かっているか。」私の言葉に気をよくした辰くんは、押入の中からみーちゃんのお気に入りである大きなスヌーピーの人形を探し出す。洋もすっかりご機嫌になっていて、辰くんと一緒に人形を持ち、「みーちゃん、はい。」とよい子ぶりを見せてくれる。みーちゃんは足をばたつかせて喜んでいる。「ぼくが幼稚園行ったらみーちゃん泣くかなぁ？」と、あらぬ（？）心配をしている辰くん。

「ほんとだねぇ」と相づちを打ちながらみーちゃんと辰くんの背をたたく。スヌーピーと私を枕に安らいだみーちゃんが寝ると、辰くんも続いて眠りに落ちた。

これからが洋の天下の時間帯。私を独占しての大騒ぎが始まった。「これなぁに、これは？」の質問責めから「抱っこして」。

抱っこしたら眠るだろうと、いつものパターンを思い、抱っこをすると、少しもしないうちに「降りる。飛行機やって」一回だけとの約束をし、飛行機をすると大興奮！。

キャッキャッと声を上げて笑い、洋特有のオランウータン踊りも始まった。誰にも止められないほどに盛り上がっている洋に、私は最後の手段である寝たふり攻撃を始めた。「起きて、起きてよ」と私の体をゆする洋。それでも起きない私にお尻ペンペンやこちょこちょを仕掛け、最後に「タオルかけて」と断れない要求を言い出した。私はタオルケットを差し出し、「おやすみ」と言い、洋はタオルケットをおなかの上に丸めて乗せるという眠りの儀式をしている。

そのうち二つの寝息は三つになり、部屋に静けさが戻ってきた。

さまざまな思いから解き放たれて眠る三人の顔は、私の心を安らかにしてくれる。

おやすみ辰くん、おやすみ洋、おやすみみーちゃん。洋、いつもの夜泣きは今夜はかんべんね。

養護メモ 57

家族 その十一『情緒10』

菅原 哲男

「ウッセーナァ！、サワンジャネンヨ、スケベ！」と香津子。

「ブッコロシテヤル！、テメエナンカ、キエロヨ！」これは卓。

「ウッセエナア！カンケーネエダロ。アッチイケヨ！」と尭。

中学生以上が半数を占めて始まった光の子どもの家の十一回目の夏休み、こんなやりとりが何回かあった。

地元の要請で非行の表れる前の幼児だけを受け入れた開設当初にやってきた香津子と卓と尭。彼らはいま思春期まっ只中を生きている。

思春期の反抗の表現は、それまで素直で愉快な子どもたちの表情が鋭く、態度が横柄になり、言葉遣いも冒頭に記したように乱暴になって、ある時期に一変する。自分の非を認めることがないか、少なくて、それを大人やまわりのせいにする。屁理屈や非難が得意で挑発も巧みになるが責任の中心からはすり抜ける。

四才の彼らが、一様につるりとした寒く堅い表情で全身に不安を表現してやってきてから十年余り・・。

熱を出しては医者に駆けつけ、遠足に付き添い、教師の差別的発言には彼らの誇りを回復するまで話し合い、地域の子とのけんかには彼らに代わって涙して頭を垂れ、彼らの最も心を寄せる家族を捜しに走った。

最も美しい青春の時代を埋め込んで育ててきた結果がこれなのかと、ことさら担当の保母は落胆は激しい。

「肉体の内部からつきあがってきだしたもやもやしたものが、肉体の秘密とともに父や母に距離をとらずにいられなくしたらしい。それまで少年らしい高いよく透る声が自慢だったのどが、ある日突然醜く潰れた。夕方になると人懐かしさにいたたまれなくなって、よく外をうろつくようになった。体操の時同級生の女子が黒いブルーマに穿きかえて動きまわるのが、急にまぶしくて直視できなくなった。」と中野孝次は『麦熟る日に』に書いている。

身体的な成長とともにまわりにいる大人への堅かった信頼がゆらぎ、唯一無二の親友も競争相手になり、嫉妬や不信あるいは差別感などを持つこともあり激しく変化していく。また、異性への関心と緊張は怒涛のように飲み込み、高校受験のプレッシャーが襲いかかる。

卓が職員と取っ組み合いをした。最も力を注いでいる高校進学のための学習指導をめぐってのことだった。

「あいつが悪いんだ！」と言ってはばからず、謝らない卓に私は謝罪を迫り、段々激しく叱責した。

突然、激しい衝撃が私の顔面をおそった。卓が私に殴りかかったのだ。

私は動転した。

三十年近い養護施設の経験にない出来事を何とか処理しようとするのだが、頭の中が一向に動かなかった。

これは、もはやここで卓と一緒に暮らすことが出来ないと言うことだ、と思った。そして卓にそう言った。私か君のどっちが出ていくかを考えよう、とも言った。

卓が泣いて詫びた。しかし、どうにもそれで許していいとは思えない。

ともかく児童相談所に一緒に行って相談しようと提案した。

高三の睦男が「許して下さい、もう一度やり直しの機会を下さい。」と涙を流して頭を垂れた。亜紀が顔をぐしゃぐしゃにして怯えるように泣き、勇も千沙も泣いていた。

私は厳のように許しを拒絶した。

明日、児童相談所に行くから荷物をまとめておくように言って、私は切り上げて本園に帰ろうとした。

「すみません、卓の十四年余りの人生の十年もの間私が親代わりで育ててきました。卓が悪いのは私が至らなかったからです。卓がここを出ていくのなら私もここにいるわけにはいきません。私を辞めさせて下さい。」と、担当の倉沢智子が泣きぬれて、しかし、きっぱりと言った。

みんな声を上げて泣いた。特に卓は激しく泣いた。

人は何ものかに執着してそれを獲得し、そして、それを捨て、それから離脱して成長していく。その分離・離脱の時期がエリクソンの言う発達上の危機なのだろうと思う。

その危機は、所属する共同体の力を集め乗り越えていくのである。その共同体の力量が試される。

その全てのものの中で母親の存在は情緒的であるが故に実に強い力なのだ。すんでの処で危機を脱する。

卓は危機をひとつのり越えて情緒的に成長し、次の危機へ向かう。

お知らせ

1996年度も基準外職員確保のため、バザーを行います。不要品などのご協力をよろしくお願いします。

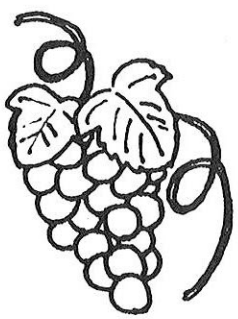
送り先は、光の子どもの家気付
バザー実行委員会

日誌抄（子どもと創る暮らしの風景）　6月1日～7月31日まで

6月1日　朝日新聞高野弦記者来訪　設立当初から現在までの経過について取材を受ける。
3日　東大宮教会永野三恵氏よりバザー用品を。感謝。東大宮教会も。　感謝。
4日　中里商店よりバザー用品を。
5日　江守ヘヤーサロンよりいつもの散髪ご奉仕。感謝。
○　湯河原の有志バザー用品を集めて下さり感謝して搬入。
○　池内氏バザー用品をたくさん。ありがとう。
○　加須市の梅沢、栗原、小谷野氏バザー用品を。感謝。
○　朝日新聞埼玉版トップに光の子どもの家の設立からの経緯と現状、バザー予定などの記事が掲載される。
6日　バザーの会場準備、値付けなどを後援会、しずくの会などのご協力を得て始める。
8日　職員子ども数名がお世話になっている絵画クラブ木葉会（コヤノ亨氏主宰）よりバザー用品をたくさん。
10日　第2回バザー実施。加須市しずくの会、光の子どもの家後援会、光の子どもの家実行委員会が職員確保のためのバザー委員会を構成して準備から実施までを。今にもやって来そうな梅雨空が開始時間にはすっかり晴れ上がり、朝日新聞が大きく取り上げて下さったこともあって、地域はもちろん、横浜、東京、静岡、群馬、千葉などからも駆けつけて下さり、盛況裡に終わる。特に、後援会の金子嘉雄会長など役員が腕を振るった手打ちうどんが好評でお昼を待たずに1時間余りで完売。梅雨ひでりのような法人会計へ強力な助力。
○　山本幹雄、聡一郎氏より、浄水器などをいただく。
11日　日本キリスト教団岩槻教会より、恒例となった花の日礼拝に捧げられたきれいなお花をたくさん。感謝。
12日　善綿嘉基（2才6カ月）5年ぶりに入所。
24日　バザー実行委員会反省会。来年に向けてじっくり。
27日　夏休み、特に家族関係の確認とこの国の豊かな情緒を養うお盆ににひとりでも多くの子どもたちの家族の元への帰省を願って家庭調整のための訪問を開始。
7月13日　安田貴志<郡市陸上大会で800m、高跳び、リレーでそれぞれ県大会出場権を獲得。バンザイ！。
15日　元タカラクラブの松永美千代氏、大坂千沙にバースデーカードとプレゼントを。10年も続けて。感謝。
21日　第1学期終わる。原道小学校全教師おいで下さって子どもたちの現況と夏休みの課題の確認などを懇談。
○　夏休みオープニングフェスティバルを園庭でバーベキュー、花火などを楽しみこの夏休みの課題と目標などを確認する。女子聖学院ヴォランティア、後援会、愛育班なども駆けつけて、盛大に。
22日　子どもたちの就職前の訓練を2年続けてお引き受け下さっている割烹萬屋さん今年もおいしい鰻を。感謝。
おかげさまでこんな生活を続けております。　（智子）

反射光

開設十年が過ぎ十一回目の秋です。☆幼児で溢れ返っていた園庭に日中は人影のない数年の静けさを破り、この7月小さな子どもたちの影が動き回る風景がよみがえりました。☆本誌も隔月発行を何とか守り六十一号の発行を果たしました。☆過日、編集委員5名でケーキとお茶でささやかに自祝しました。みんなこの十年を共にした者たちで、さまざまな意味での変化の大きさをしみじみ確認しました。☆過ぎた十年はあっと言う間でしたが、もう十年先、この国がそして私たちがどう変わっているのかと茫々たる思いにとらわれます。☆子どもたちの秒単位での成長や変化は私たちとの距離や次元を遥かにされてうろたえることしばしばです。☆増田路子氏が十周年を記念して本誌のデザインをリニュアールして下さいました。私たちも、はるかな十年先を何とか見据えながら、子どもたちへの、そして自らへの思いや決意をリニュアールして歩き始めます。（哲）


BUDO

COSMOS